



北の森林 国有林



定山溪 水源の森

今月のトピック

- ・平成 29 年度
北海道森林管理局の主な取組



国民の森林・国有林

林野庁北海道森林管理局

平成29年度北海道森林管理局の主な取組

北海道森林管理局では、北海道の土地面積834万haのうち、約4割にあたる304万haの国有林を管理しています。

その8割近くを天然林が占め、世界自然遺産である知床をはじめ、原生的な森林が広がっており、希少な野生生物が生息するなど、学術的にも価値の高い森林が数多くあります。

一方で、戦後植栽されたトドマツやカラマツなどの人工林資源が成熟し、循環利用できる資源として、林業・木材産業の成長による地域振興や循環型社会の構築への貢献が期待されています。

北海道森林管理局は、公益重視の管理経営の一層の推進、森林・林業再生に向けた貢献に向け、組織・技術力・資源を活かし、民有林関係者とも連携を図りつつ、以下の事項に重点的に取り組みます。

平成28年度台風災害からの復旧

①台風災害の早期復旧

昨年の台風による森林・

林業関連被害は全道で

209億円（うち国有林の被害は138億円）に達しています（平成29年3月現在）。復旧事業の早期発注を行うとともに、森林土木工事として全国で初めて「概算数量発注方式」（工事発注にあたり、詳細な設計図書によらず概算数量で発注し、細部は施工中の設計変更によって処理する方式）の採用、立木販売と造林の混合契約の推進等により、被災箇所への早期復旧に取り組みます。



洞爺湖周辺の風倒被害箇所

②ドローンの活用

森林調査への活用

機動性や効率性等の利点を持つドローンを森林・林業の現場においても活用するための実証や、実際の使用等に取り組みます。



ドローンで撮影した山腹崩壊箇所（本別町）

公益重視の管理経営の一層の推進

③天然力を活用した多様な森林づくり

公益的機能の高度な発揮を図るため、北海道や森林総研等からの協力を得つつ、天然生稚樹を活用したトドマツ人工林の新たな施業タイプの開発や、人工林内での地表処理による天然更新試験の実施、また、天然林施業による持続可能な森林経営の検証等、新たな施業技術の実証等により、天然力を活用した多様で健全な森林への誘導に取り組みます。

④生物多様性保全への貢献

保護林制度100年の節目を期に保護林の見直しを進めます。現在、北海道内に設定されている森林生態

系保護地域をはじめとする224箇所の保護林を分かりやすく効果的に保護管理するため、新たな3区分191箇所を再編し、管理水準の向上を目指したモニタリング手法を検討します。また、希少種の保護管理においては、シマフクロウなどの生息環境の向上を目指した積極的な施業を進めます。これらの生態系保全管理の一層の推進等により、生物多様性の保全に貢献します。



⑤エコシカ被害対策の推進

今年度スタートした第5

期の北海道エゾシカ管理計画では、更なる捕獲対策の継続が必要とされました。北海道森林管理局においても、エゾシカの生息や被害の動向把握、捕獲体制の構築、狩猟者が捕獲しやすい環境づくりなど、地域や関係機関と連携した、エゾシカ対策を推進します。



⑥レクリエーションの森の観光資源としての活用

今年度より、国有林の「レクリエーションの森」を核とした観光地づくりを推進する「森林景観を活かした観光資源の創出事業」がスタートします。全国に設定された「レクリエーション

の森」から、特に魅力ある自然景観を有するなどのモデル的な箇所について地域と連携して情報発信や重点的な環境整備等を実施します。



⑦アイヌ施策への貢献

白老町における民族共生象徴空間の整備に関連して、ポルト自然休養林の活用に向けた取組を推進します。また、平取町内の国有林において北海道本来の森林の再生等に取り組みとともに、道と連携して伝統的工芸品「風谷アットゥシ」の原材料となるオヒョウニシの安定的な供給に取り組み、これらによりアイヌ政策への貢献を推進します。

森林・林業再生に向けた貢献

◎造林の省力化・低コスト化

組織、技術力、資源を活用し、低コストで効率的な作業システムの提案や先駆的な実行、民有林と連携した森林整備の実施、森林・林業技術者等の育成、林産物の安定供給等を通じて、北海道の森林・林業の再生に積極的に取り組みます。

◎優良種苗の安定供給の推進

人工林資源が主伐期を迎える中で、再造林に向けた

種苗の安定供給が求められています。

このため、北海道とも連携し、苗木生産に必要な種子の増産を目的として、カラマツ及びトドマツ採種園において、種子の着果を促進させる処理（環状剥皮）や採種を容易にする採種園の整備に取り組みます。

また、国有林が必要とするコンテナ苗の品質・規格の標準化やコンテナ苗の需要見通しについての情報提供等に努めること等により苗木生産者等との連携を強化し、優良種苗の安定供給を促します。



コンテナ苗

⑩工程管理による生産性向上の取組

高性能林業機械の導入は進んでいますが、生産性向上のためには、それぞれの機械を効率的に組み合わせた作業仕組みとすることが重要です。

このため、29年度は試行的に1署当たり1契約事業者に工程管理表を作成していただき、事業者が自社の作業工程を分析しボトルネックの解消等を図ることを促すなど、生産性の向上に資する取組を行います。

また、素材生産事業者が簡易に工程分析を行えるシステムを開発しましたので、北海道、関係団体等と連携し、民有林所有者、素材生産事業者への普及に取り組みます。

研究機関等と協働で自動植付機、草刈機械の実証実験を予定

コンテナ苗自動植付技術の実証

乗車式草刈機による地帯・下刈の実証

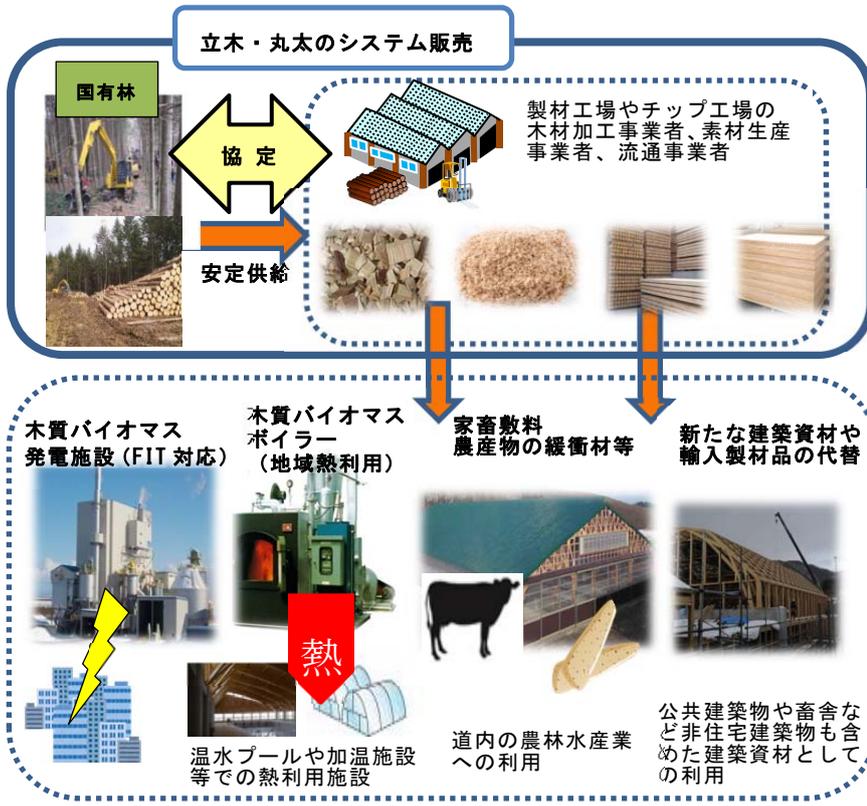


ハーベスタによる枝払い、造材

⑪ 国有林材の安定供給・木材利用の拡大

森林資源を活用した地域振興を推進するため、地域材の需要拡大、木質バイオマスの発電や地域熱利用への貢献、地域農林水産業への寄与等に重点を置いた、立木及び丸太のシステム販売等に取り組みます。特に、民

有林と連携した立木システム販売は、北海道が全国に先駆けて実施しており、引き続き取り組みます。また、公共建築物等の木造化・内装木質化事例や活用可能な各府省施策の情報の収集・提供等により、木材利用の拡大に取り組みます。



⑫ 民有林支援の推進

北海道と連携して、森林・林業の再生に向けた市町村の取組を支援します。具体的には、全市町村に設置された市町村森林整備計画実行管理推進チームの活動を通じた森林整備計画の実行管理を行います。また、地域が抱える課題の解決に向けた署別のテーマに取り組みなど、具体的な支援を推進します。

市町村森林整備計画実行管理推進チームでの活動



根釧西部森林管理署では、防風保安林の主伐に係る現地検討会を開催し、市町村森林整備計画の樹立に向けて国有林の事例を紹介。

平成 29 年度 記者発表



4月19日(水)、北海道森林管理局の主な取組について、マスコミ各社向けの記者発表を行いました。記者のみならず熱心な質問を受けました。北海道森林管理局では、道民の皆さんとともに、健全で活力ある森林づくりを進めてまいります。

区分	単位	平成28年度当初	平成29年度当初	対前年比
販売量	立木販売	千㎡ 680	680	100%
	製品販売	千㎡ 626	620	99%
造林	更新	ha (222) 1,485	(814) 1,016	68%
	保育	ha (3,072) 13,006	(788) 11,917	92%
林道	新設	km (10) 41	(20) 37	90%
	事業費	百万円 《 421 》《 55 》	《 1,294 》《 460 》	100%
治山事業	百万円	《 142 》《 0 》	《 6,980 》《 271 》	
	百万円	(552) 3,183	(562) 3,199	101%

注1：() は前年度繰越で外書
 注2：更新は、新植、改植、天Iの地拵、植付面積の合計である
 注3：保育は、下刈、つる切、除伐、除伐2類、保育間伐(存置型)の合計である
 注4：造林の更新、保育面積には、治山費による実行分を含む
 注5：《 》は、災害復旧事業費の前年度繰越で外書
 注6：〈 〉は、災害復旧事業費の過年度災害分である



石狩地域森林ふれあい推進センター

今回は、当センターが実施している森林教室における新たな視点での取り組みについて紹介いたします。

2020年から全面実施される次期学習指導要綱の目玉の一つに、学ぶ側である生徒に主体性を持たせ、理解の質を高める効果が期待されている「能動的学修」の導入があります。

センター実施の森林教室においても、森林の中で子供たちが自らが課題を見出し、自らがそれを解決するための必要な「能力・姿勢」を身につけることを目的に、札幌市内にある定山溪中学校において能動的学修を実践してみました。

定山溪中学校は、札幌市の水源地域にある自然環境に恵まれた学校です。これまで、センター実施の森林教室の中で、環境保全のための調査・啓発活動、ポット苗植樹・生育調査等を実施してきていますが、これらはセンターでプログ

ラムを作成した上で、テーマを与えるなど、どちらかと言えば、教える側が主体である受動的な学びでした。

中学校からも「学校の近くで自由な発想で本物の森づくりが体験できる場所が欲しい」との要望があり、学校から約1kmのところにある国有林内に活動地を設定しました。この場所は建物敷地跡で、面積は約0・三ヘクタールです。



ゆめの実現に向け汗をかく

雑木や大型草本が繁茂し、国有林においては「除地」となっており、森林施業に関する規制が少ないことから自由な発想で森づくりができます。この活動地を生徒たちは「ゆめの森」

と名付けました。

この取り組みに当たって①生徒の主体性を尊重、②発見や気づきを重視、③自由な発想を妨げない、との基本方針を定めました。そのため、センター職員自身もこれまでの森林づくりの基準にこだわらない、生徒へのアドバイスは必要最小限、実施プログラムは作成しない等、これまでとは異なる対応で臨みました。



インターンシップの学生と一緒に森林づくり

生徒たちは、どのような森林を目指したいかを考え、自らの森林のイメージを絵にしました。

それぞれのイメージを実現するために何をすれば良いかを話し合った結果、まずは歩道が必要と気づき、歩道の作設・測量・

図化を行いました。また、自らの発案で、ゆめの森の看板設置、動物及び昆虫調査を実施しました。



JICA 研修の世界各国の方々と交流

更に、札幌工科専門学校生のインターンシップ、JICA研修の場としても活用し、植樹も行い、エゾシカ被害調査や防護ネットも設置しました。

これら能動的学修により、学ぶ側である生徒は、自らが体験で学び、自らが判断し、仲間と協働で活動することができました。

教える側のセンターでは、体験のおもしろさ・課題に気づかせ、生徒の活動を引き出させることができました。

今後ともティーチャーとしてだけでなく、コーディネーターとしての役割を意識し、しっかりと見守っていきたいと思います。

こんにちは 森林官です!

渡島森林管理署
若松森林事務所
森林官
工藤 哲士



三本杉岩

町の西側は日本海に面しており、日本一標高が高い茂津多岬灯台や日本一険しい参道とも言われる太田神社、数々の奇岩などが点在しています。

○所在地せたな町

せたな町は道南の檜山振興局の北部に位置する町で、北は道南最高峰の狩場山、南は遊楽部岳等の山地となっており、その中間を1級河川の後志利別川が流れています。



親子熊岩

特に三本杉岩や親子熊岩は町のランドリースイーンにも描かれています。

○森林官の仕事

森林官の仕事は森林の状況の調査や民地との境界の保全、伐採事業の監督など多岐にわたり、一言で言いますと「国有林の管理」が仕事といえます。

その年々の仕事はだいたい決まっていますが、中には突発的に発生する仕事もあり、その代表は地震や台風などの自然災害です。

28年度の台風では若松森林事務所内でも林道の法面崩壊や倒木等の被害が発生し、被災状況の確認・報

告や林道の点検・開通作業など忙しく日々を過ごしました。



風倒被害の状況

○去年の印象的な体験

林道や現場の行き帰りに車で走行していると、たまにキツネやタヌキなどの動物に出会います。

その日はカーブを曲がりきった少し先に親子熊を目撃しました。それ以上接近しないようバックしようとしたら、母熊が猛然とこちらに走ってきました。

あわやぶつかかる5m程手前で母熊はきびすを返し、子熊と一緒に森に去って行きました。

今までも車から熊を目撃したことは何回もありましたが、威嚇行動を取られた

のは初めてでした。あらためて国有林が動物たちの縄張りであることを実感した体験でした。

○最後に

山に木を植え、十分成長するまでには、少なくとも50年の時間がかかると言われています。一方、一人の森林官が直接管理に携わるのは数年の間だけです。

森林官の仕事は国有林の管理と書きましたが、その中でも次の人に仕事を引き継いでいくことが大切になります。

私も次の人にしっかりとバトンを渡せるよう今後も業務に勤しみたいと思います。



草原のキツネ

地域課題の解決に向けた取組

原木供給力の増大に向けた取り組み

上川中部森林管理署



28年5月に閣議決定された「森林・林業基本計画」の中で、原木供給力の増大に向けた施策として、全木集材の普及、主伐再造林対策の強化、素材生産と造林等を兼務できる人材の育成及び効率的な作業システムの普及・定着が求められています。

当署では、これらに向けた取組として、「全木集材現地検討会の実施」、「コンテナ苗植栽研修会の実施」、「新規就業者確保に向けた取組」を実施してきました。

全木集材現地検討会

全木集材とは、木の枝葉をつけたまま集材する方法です。

当署では、森林作業道を使い、車両系作業システムで、木寄せを全木で行う集材方法の現地検討会を林業事業体及び研究機関等を対象にして28年8月に実施しました。

この集材方法は、林地に枝葉が残らないため、地

拵えの省略やバイオマス資材（枝葉、端材等）としての利用に有利というメリットがあります。

また、伐採とコンテナ苗を用いた植付を一括して発注する「伐採・造林一貫作業システム」を併せて実施し、地拵えの省略や苗木運搬作業の簡素化などによる造林コスト削減の可能性についても示しました。



グラブブルウインチによる全木木寄せの様子（愛別町）

現地検討会の成果として、「このような検討会のチャレンジに敬意を表したい」「全木集材という言葉がわかりづらい」「作業システムは現地に合わせて採用すべき」という意見

が出され、今後、作業システムを検討すべき点が明らかになりました。

かになりました。

この結果を踏まえ、全木集材の功程調査を実施し、29年2月3日に札幌市で開催された「北の国・森林づくり技術交流発表会」において、現状と課題について発表しました。

コンテナ苗植栽研修会

伐採や造林など複数の作業に精通した現場作業者の育成及び効率的な作業システムの普及・定着を目的として、昨年10月に旭川地方森林整備事業協同組合と協同で、素材生産の林業事業体等を対象にコンテナ苗植栽研修会を実施しました。



クリーンラーチのコンテナ苗（上川町）

研修会では、実際に改良された植栽器具を活用した植栽体験を実施し、参加者が責任を持って植栽するよう名札をつけて、次年度現地確認の際にわかるようにしました。



スパード（左）ディブル（右）

研修会では、「根鉢の大きさと合えばディブルが一番工程が上がる」「スパードは力が必要で、苗間を測るためには長さが必要であり、ねじるためには短い補助棒が必要」「クワの方が効率がよくさそう」等の意見が出されました。これらの意見は、今後の植栽器具改良に資するため、森林総合研究所に送付しております。

新規就業者確保に向け

林業事業体の育成に資するため新規就業者の確保に向けた取組として、地元農業高校から林業事業体等への新規採用者が減少していることから、国有林関係事業体等に対し、旭川農業高等学校生徒のインターンシップ実施への協力を依頼しました。

また、上川総合振興局が主催し昨年度設置した、「旭川周辺地域担い手確保推進協議会」において実施した「山の仕事説明会」への参加についても林業事業体等に協力依頼しました。

当署の取組としては、旭川林業土木協会が旭川農業高等学校の生徒を対象に実施した「現場見学会」に協力し、治山事業地での説明、講師として国有林の紹介、治山事業の意義・重要性などを解説しました。

また、旭川農業高等学校森林科学科2年生のインターンシップを3日間実施しました。

これらの結果、「山の仕事説明会」に多くの林業事業体や森林土木工事業者に参加いただいたところであり、就職先としての選択の幅が広がったことと思います。



治山現場でインターンシップ (上川町)

近年、国有林の職場を希望する旭川農業高校の森林科学科生徒が減少している中で、インターンシップや「現場見学会」を通じて国有林の仕事を知り、今年度も公務員試験受験を希望する生徒がいることを、担当の先生から伺いました。

今後は、他の学校への取組も検討しており、引き続き幅広く林業への就業者確保に向けた取組を実施していきたいと思えます。

糠平グリーンクラブ
結団式と小鳥の村開村式

【東大雪支署】

平成29年4月21日、上士幌町立糠平小学校にて、糠平グリーンクラブ結団式および小鳥の村開村式が開催されました。

式では、一年間の目標を6名の団員が一人一人発表しました。団長を務める6年生の田中くんは、「探鳥会ではオオルリを見たい。森林教室では木の実や樹木の特徴を覚えたい。」と力強く抱負を語ってくれました。

糠平グリーンクラブは、糠平地域の自然保護と団員の健康な身体と健全な精神を養うことを目的として昭和47年に結成され、主に探鳥会や美化活動を精力的に行っています。昨年度は、これまでの活動が評価され、前田一步園財団(釧路市)の「一步園ジュニア自然

環境奨励賞」を受賞しました。

上士幌町教育委員会と東大雪支署が協定締結している遊々の森「小鳥の村」を主な活動拠点としています。

今年も森林の中で、元気いっぱいな団員のみなさんに会えるのを心待ちにしています。



団員・顧問・指導員全員で記念写真



森林教室でトドマツの直径を測定

お知らせ

北海道森林管理局のホームページでは、皆様、森林・林業・木材産業に対する理解を深めていただけるよう「イベント情報カレンダー」を掲載しておりますので、ご覧下さい。

広報 「北の森林 国有林」5月号
発行 北海道森林管理局
編集 総務企画部 企画課
〒064-8537 札幌市中央区宮の森
3条7丁目70
I P 電話 050-3160-6300
電 話 011-622-5213
F A X 011-622-5194
<http://www.rinya.maff.go.jp/hokkaido/>